

## 中国山西省の寺院と文化財

「二〇〇九年度山西省調査から」

名古屋大学大学院人間文化研究科

(よしだ・かずひこ)

吉田彦彦

## 本年度の調査

日本の仏教を考究する際、その思想にしても、また仏像、仏画、建築といった文化財の方面にしても、日本一国の問題として考察するわけにはいかない。今日の学問的水準からするなら、日本の仏教をアジア東部の仏教史の中で考えるという視角が重要になるし、アジア東部のみならず、広くアジアにおける仏教の歴史的展開という観点を念頭において考えていく必要があるだろう。

私たちは、科学研究費の補助を受けた共同研究「仏教東漸および中国思想の受容から見た聖徳太子信仰の成立と展開に関する多角的研究」(基盤研究(B)、研究代表者 中部大学教授大山誠一、課題番号二〇三二〇〇一七、平成二〇〜二二年度)を実施するにあたり、二〇〇九年度、中国山西省の寺院、祠廟、古城などの

調査を行なった。山西省は、北魏以来の仏教文物が今日に伝来する地で、

多くの研究素材を与えてくれる。ここでは、今回の調査の概要と、二、三の注目点について記しておきたい。

まず、調査対象地を以下に列記しておく。調査期間は二〇〇九年九月九日〜一六日(九日は移動のみ、一六日は北京)で、九〜一〇日は大同、一一〜一二日は五臺山、一三〜一五日は太原を拠点に調査を実施した。

一〇日 雲岡石窟、観音堂、善化寺、華嚴寺(周囲のみ)、

圓通寺

一一日 懸空寺、仏宮寺(応県木塔)、淨土寺

一二日 五臺山菩薩頂、顯通寺、塔院寺、殊像寺、北臺臺頂、竹林寺

一三日 金閣寺、清凉寺、仏光寺、広濟寺、南禅寺、永祚寺(双塔寺)

一四日 双林寺、平遥古城(城壁、

## 観光と文化財

文廟、城隍廟、清虚観、  
県衙、鎮国寺、  
一五日 天龍山石窟、晋祠、山西博物院、山西省芸術博物館(純陽宮)、崇善寺、  
一六日 地壇(北京)

これらの中には、一般の見学者、参拝者がほとんど訪れないところも少なくなかった。だが、多くの観光客で混雑しているところもあった。特に、雲岡石窟、五臺山、平遥古城はそうだった。これらは、貴重な文化財を伝える史跡であると同時に、内外の多くの人々が訪れる観光地でもあった。中国は、現在、ユネスコの世界文化遺産への登録に力を入れている。平遥古城は一九九七年、雲岡石窟は二〇〇一年、五臺山は二〇〇九年に世界文化遺産に登録された。貴重な歴史的文物は、また人々の心を感動させる力を持つ文化遺産という側面を持つが、中国では、世界文化遺産への登録が観光開発とストーリーに結びつき、経済活性化の起爆剤の一つになっているのである。本誌前号では、「観光まちづくりの国際比較」が特集されたが、山西省のあり方は、観光まちづくりという観点

から見て注目すべきところがあるように感じられた。

雲岡石窟は、北魏の時代に開鑿<sup>かいさく</sup>がはじめられた著名な石窟寺院で、これまで幾度となくあつた廃仏の危機をくぐりぬけて、今日にその貴重な姿を伝えている。ここには内外の見学者が訪れていたが、特に国内からの見学者が多いようで、熱心に説明を読み、聞きしている様子が印象的であつた。平遥古城は、明代の皇城の遺跡で、城壁が現存し、城内には、文廟、城隍廟、清虚観、県衙などを伝えている。ここは、国内からの観光客のみならず、外国からの見学者の姿が目立ち、ヨーロッパ人も多かつた。

五臺山は、南北朝時代以来の仏教聖地で、日本の円仁、成尋などが訪れたこと（『入唐求法巡礼行記』『参天台五臺山記』）でも知られている。五臺山の寺院、文物を調査することは、今回の調査の主要な目的の一つであり、円仁が訪れた地を実際に歩くことができたのは大きな収穫であつた。ここも、世界文化遺産登録を契機に観光開発に力が入れられており、内外の参拝者、見学者でにぎわつていた。五臺山は交通の便のよくないところにあるが、現在、高速道路の整備が進められ、近くに空港を建設する計画が進んでいるという。

## 天龍山石窟

天龍山石窟は、太原市の西南にある天龍山に存在する石窟で、東魏の高歓と、その子の高洋（北斉の初代の文宣帝）によって開鑿がはじめられ、隋唐時代に継承されたという石窟である。この、仏像、仏画はかなりの部分が削りとられ、海外に流出してしまっているが、窟によって部分的に残存するものもあり、往時の姿をしのぶことができる。天龍山には、全部で二五の窟があり、そのうちの第二、第三窟は、六世紀中頃の東魏末期〜北斉初期のものだと

いう。第三窟には、正面および左右に三尊像が彫られている。正面の三尊像の中尊は、頭部を失っているが、袈<sup>けあ</sup>（裳）の裾を台座の前面に大きく垂らす様式のものになっており、ウエストのところに裙の帯の結び目が見える。懸裳の作り方は、法隆寺金堂釈迦三尊像の中尊や薬師如来像とよく似ている。正面の三尊像の脇侍菩薩像も、残念ながら頭部が削りとられているが、わずかに残る垂髪には赧<sup>かみ</sup>手<sup>て</sup>がはつきりと見てとれる。これは法隆寺金堂釈迦三尊像の脇侍菩薩像などに見られるものによく似ている。同行の藤井由紀子氏（一橋大学、美術史）は、法隆寺の仏像の様式は、従来、北魏の様式を受け継ぐ



天龍山石窟 如来坐像

ものと理解されてきたが、むしろ東魏・北齊の様式を受け継ぐものとするべきだと説明してくれ、一同大いに納得した。



天龍山石窟 菩薩像の垂髪（赧手）

## 唐、遼、金代の文物

南禅寺は、五臺山を車で南に下った交通不便の地、五臺県東冶鎮李家莊村にあった。寺内には、大殿がポツリと残るばかりだが、これが著名な中国最古の木造建築で、唐代の建物だという。すなわち、梁架題記の「因旧名唐大建中三年歲次壬戌月居戊申丙寅朔庚午日癸未時重修殿法顯等謹志」から、唐の建中三年（七八二）に再建された建物だとされている。建物の規模はそれほど大きくもではなく、むしろ仏堂を思わせる小ぶりのもので、間口、奥行とも三間で、平面がほぼ正方形の建物であ



南禅寺 大殿

る。斗拱、組物、丸垂木は簡素であるが、はるかに日本の寺院建築の源流を思わせる風格がある。殿内には、中央の釈迦如来像をはじめとして、現在一四体の仏像が並んでいる（かつて一七体の仏像が存在したが、一体は盗難に遭い、二体は修理中という）。すべて木心塑像で彩色がほどこされており、唐代の仏像だという。殿内に柱はなく、腰の高さのあたりまでの石の壇があり、その上に仏像が安置され、横や後など周囲をまわれる作りになっている。

また、五臺県豆村鎮の仏光山麓にある仏光寺にも、唐代の建築、仏像、壁画、石造物が現存している。同寺

の東大殿は、唐の大和十一年（八五七）の建物であり、中国で二番目に古い木造建築である。東大殿は、間口七間、奥行四間の建物で、会昌の廃仏後に建立されたものだという。殿内には、釈迦如来像をはじめとして三五体の唐代の塑像（彩塑）がずらりと並び、壮観である。壁画もあり、これも唐代のものである。建物の屋根を見ると、丸瓦を用いず、平瓦を上下に交互に組み合わせた「重唇板瓦」なる様式になっているのが大きな特徴である。一方、山門（韋馱殿）を入って左手には文殊殿がある。こちらは金代の建築で、天会十五年（一一三七）のものだという。この屋根の瓦も、「重唇板瓦」になっている。殿の内部には、文殊菩薩像をはじめとして六体の塑像（彩塑）があり、これらも金代のものだという。ここには、他に、地元の人々が信仰しているという黒色の「竜王菩薩像」も安置されていた。仏光寺には、また、唐代の仏頂尊勝陀羅尼幢（ぶつちやうそんしょうだつにやう）が二基現存している。一基は東大殿の前にあり、銘文が刻まれていて、「奉為 國及衆生造佛頂陀羅尼幢」とはじまり、「大中十一年十月卅日建造」の文言が判読できる。東大殿の年代比定は、この銘文が根拠の一つになっているものと思われる。もう一基は、山門を入ってすぐの参道の右側





仏光寺 仏頂尊勝陀羅尼幢  
(大中11年)

にあり、これにも銘文がある。そこに、『唐乾符四年歲次丁酉七月庚子十九日戊午建造立畢』の年月日が読み取れる。ここから、こちらの経幢は乾符四年（八七七）のものと考えられている。また、前者には「昭義軍勝願寺比丘尼寶嚴先發願於臺山佛光寺造佛頂尊勝陀羅尼石幢一所」「同建造石幢主劍南東川盧州淨義縣高福寺比丘尼寶□」の文言があり、後者にも、「施主女弟子李氏郎君靈察」の文言があつて、この二基が女性と仏教の問題を考える上で貴重な史料になるものであることが知られる。

なお、仏頂尊勝陀羅尼幢は、五臺山の文化圏に数多く見られ、今回の調査では、他に浄土寺、広濟寺で見ることができた。その日本への影響は今後の研究課題になりうるものと思われる。中国の仏頂尊勝陀羅尼幢に関する近年の研究に、劉淑芬『滅罪与度亡——仏頂尊勝陀羅尼經幢之研究』（上海古籍出版社、二〇〇八年）がある。

今回の調査では、また、著名な「応泉木塔」を実見することができた。

これは、大同市の南約七・二キロメートルの朔州市応県にある仏宮寺の釈迦塔で、中国現存最古で最大の木塔である。全高は六七・三メートル。八角、九層で、成立は遼の清寧二年（一〇五〇）。斗棋、組物を密に用いた大変雄大な塔であった。

大同市街にある善化寺も、多くの文化財を今日に伝えている。この寺は、もとは普恩寺といったが、明の正統十年（一四四五）、寺号を善化寺に改めたという。普恩寺は、遼末に戦禍に遭い、金初に修復、再建されたという。山門（天王殿）を入ると三聖殿がある。これは金代の建築で、間口五間、奥行四間で、斗棋が大きく立派である。この斗棋は「斜棋」と呼ばれる独特のもので、斜めにそりたち、花が開いたように華麗に見える。殿内には、中央に釈迦如来坐像が安置され、脇侍像二体を従えている。その左右には、文殊菩薩坐像、普賢菩薩坐像が安置され、釈迦、文殊、普賢で三聖ということになる。これらは金代の仏像だという。また、金代の石碑である「大金西京大普恩寺重修大殿記」碑がある。これは、「大定十六年丙申八月丁酉初一日癸酉」の日付を持ち、大定十六年（一一七六）に至るまでの寺の歴史が刻まれている。三聖殿の北側にある大雄宝殿は、正面七間、奥行五間のどうど

うたる建物で、遼代の建築だという。殿の内部には、正面に五体の如来坐像が安置され、中央の盧舎那仏の左右に迦葉、阿南が、また如来坐像と如来坐像との間に一体ずつ計二体の菩薩立像がある。殿内の左右には、二四体の護法諸天像がずらりと並び、壯観である。これらも遼代の仏像（金代とする説もある）だという。

## 村の院

鎮国寺は、平遥古城の東北約一二キロメートルの晋中市平遥県郝洞村にあり、文化遺産としての平遥古城の構成部分の一つとして、古城、双林寺とともに世界文化遺産に登録されている。この寺の万仏殿は、南禅寺大殿、仏光寺東大殿に続く年代のもので、梁架題記の「維大漢天会七年建造」という記述から、五代の北漢の天会七年（九六三）の建物であることが知られている。この万仏殿も南禅寺大殿と同様に小ぶりのもので、間口、奥行とも三間で、平面がほぼ正方形の建物である。斗棋は風格ある立派なもので、檐がよく張り出している。

殿内には、中央の釈迦如来像をはじめとして一一体の塑像（彩塑）がある。これらは、建物と同じく五代



鎮国寺 万仏殿 梁架題記

の時代のものだという。殿内には、柱はなく、腰の高さあたりまでの壇があつて、その上に仏像が安置されている。天井を見上げると、複数の梁架題記が見てとれる。大漢の天会七年のものは、残念ながら目視、確認することができなかったが、「大金天徳三年歳次辛未七月 補修」とあるもの、「大明嘉靖十九年歳次庚子二月補修（京城寺改寫鎮国寺）」とあるもの、「大清嘉慶二十年歳次乙亥三月 重修」とあるものなどが確認できた。これらから、金（天徳三年（一一五一）、明（嘉靖十九年（一五四〇）、清（嘉慶二十年（一八一五））に建物の補修が行なわれたこと、嘉靖十九年に京城寺から鎮国寺に寺号が改められたことが知られる。さらに、「郝同村院主僧 修詮（割書四行略）村衆（以下人名略）客戸（後略）」と墨書されているものがあつたのが注目される。残念ながら、「客戸」以下の部分を十分に判読することができず、年月日の部分があるのかないのかもわからず、いつの時代の記述である

のかは不明である。それでも、郝同村の村院の院主の僧の修詮という記述は大変注目される。この寺、あるいはこの殿が、村の院として機能していた時代があつたことが知られるからである。その院主の僧が「村衆」たちの協力を得て、この院に係する何らかの事業を行なった。その記録が梁架に書き記されたのである。私は、この墨書にすっかり目を奪われ、同行の曾根正人氏（就実大、仏教史）たちと、『日本霊異記』に見られるような日本古代の村堂にしても、あるいは日本の中世後期以降の村堂にしても、日本だけの問題としてではなく、アジア東部の歴史の中で考察しなければならぬと現地で語りあつた。

## 寺院の中の神たち

山西省の寺院では、また、伽藍の守護神としてまつられる伽藍神たちについて出会うことができた。日本の神仏習合の歴史や特質を解明するには、中国で展開した神仏融合を的確に把握しておく必要があるが、伽藍神は中国の神仏融合を考える上で重要なポイントの一つになる。

山西省の寺院には、多く「伽藍殿」なる殿があり、そこで伽藍神がまつ

られている。たとえば、平遥の双林寺には、山門（天王殿）を入つてすぐ右手に伽藍殿があり、そこに関羽（関帝）がまつられている。このように、伽藍神として関羽がまつられるのが、山西省に限らず、今の中国の寺院の一般的なパターンだと思われる。双林寺では、また、伽藍殿の向かい側、山門を入つて左手に「土地殿」があり、そこで土地神がまつられている（中央に土地神、左右に金童と玉女）。なお、鎮国寺も、山門を入つて左手に土地殿があり、中央に土地神、その左右に玉女と金童、さらにその左右に判官と牛頭がまつられている。

五臺山の寺院はどうか。殊像寺では、天王殿を入つた右手にやはり伽藍殿があり、中央に関羽、その左右に関平と周倉がまつられている。これに対し、塔院寺では、天王殿を入つた右手に伽藍殿があるのは同様であるが、内部には、孤独長者、祇陀太子、波斯匿王がまつられ、その向かつて右方に関羽、左方に監齋菩薩がまつられている。顯通寺では、山門を入つて右手にやはり伽藍殿があり、内部には、現在、施主（大功德的施主）、関羽などがまつられている。ただし、同寺の寺誌（パンフレット）である『顯通寺』（一九八五年）によれば、それは「現今伽藍殿」の様相

であって、かつて「(早期的伽藍殿)」は、中央に波斯匿王、左右に祇陀太子、給孤独長者がまつられていたという。一方、菩薩頂では、天王殿を入った右手にある、伽藍殿にあたる殿は「金剛殿」という名称になっている。その扉は閉ざされていたが、案内板によれば、内部には閻魔護法、六臂大黒天護法、大威徳金剛、吉祥天母護法、毘沙門護法がまつられているとあった。これらの寺院は、チベット仏教系寺院であるが、それらにこうした伽藍神がまつられているのは大変興味深い。なお、五臺山の北臺臺頂には、近年、寺院が建立され、「無垢菩薩殿」という殿に五臺山独自の五体の文殊菩薩像がまつられているが、他に「広済龍王殿」なる殿があり、龍の神である龍王菩薩がまつられている。龍王菩薩は、地元の人々からの信仰を集めているという。

また、恒山の懸空寺には、伽藍に向かう途中に、高さ数十センチメートルほどの小さな「山神廟」があり、中に三体の山神の画像がまつられている。懸空寺の伽藍は、多数の殿から構成されているが、そこでは仏教の仏菩薩ばかりでなく、呂洞賓など道教の尊格がまつられており、「三教殿」では釈迦、老子、孔子がまつられ、「大雄宝殿」でも中央の三聖仏の左右に老子と関羽がまつられている。

## 面然大士

山西省の寺院には、また、「面然大士」が多くまつられていた。面然大士とは、面然餓鬼、焰口餓鬼などともよばれる餓鬼で、青面狼牙の奇怪な姿の彫刻もしくは画像として造形されている。面然大士は、しかし、殿内でまつられることはないようで、多く、大雄宝殿もしくはその前後の殿の前面、基壇上の向かって左手に、横向きに(内側向きに)、数十センチメートル〜一メートル前後の龕に収めてまつられている(浄土寺、殊像寺、竹林寺、金閣寺、清涼寺、崇善寺)。ただし、殿の向かって右側の側面でまつられている事例(顯通寺)や、天王殿を入つてすぐの場所にまつられている事例(圓通寺)もある。



殊像寺 面然大士

僧が殿前に出て、左手に安置されている面然大士に線香、そして香水を捧げる儀があり、印象的だった。

面然大士には、二〇〇七年九月の西安の調査、二〇〇八年九月の天台山の調査でも出会うことができた。また、天台山の高明寺にて、水陸会の儀に出会うことができたのも強く脳裏に焼きついている。それについては、また別の機会に触れることにしたい。

面然大士は、日本では、二〇〇九〜二〇一〇年開催の「道教の美術」展(三井記念美術館、大阪市立美術館、長崎歴史文化博物館)に、千葉県観音教寺蔵のもの(明時代、画像)、京都府六道珍皇寺蔵のもの(明時代、画像)、京都府獅子林寺蔵のもの(江戸時代、画像)が出展され、話題になった。面然大士は經典にも見え、『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』『仏説救拔面然餓鬼陀羅尼神呪經』(いずれも大正新修大藏經二二卷)に記されている。だが、その歴史と特質はいまだ十分に解明されているとは言えず、今後の研究課題になっている。今後、中国における仏教と民俗信仰との融合、さらにはアジア東部における仏教と民俗信仰との融合という観点から、水陸会、施餓鬼会の成立と展開という問題を含めて、研究を進めていく必要があると考える。